

## 第36回

## 第5章 自然や他者とのかかわり

## 自然や科学技術と人間

## 今回学ぶこと

私たちが生きている近代社会は、それまでの社会とは異なり、どのような認識に基づいて科学技術を発展させてきたのでしょうか？ またそのような認識に基づいて作られ、発展させられてきた社会は、便利さの代償として、自然や人間に何をもたらしてきたのでしょうか？ 近代的自然観と自然との調和、生命への畏敬<sup>いけい</sup>について、学びます。



講師

千田有紀

## ■ 近代的自然観 ■

アリストテレスやキリスト教にみられるような自然界の一切の出来事は目的によって規定されていると考える目的論的自然観は、近代に入ってから機械論的自然観にとってかわられました。機械論的自然観には、心身二元論（物心二元論）に基づいて精神と身体とを分離し、身体や外界の一切を数量的に規定できると考えたデカルト、万有引力の法則に基づいて一切の自然現象を説明するニュートンなどの考え方があります

こうして目的論的自然観は、機械論的自然観へといわばパラダイムが変換したと考えていいと思います。パラダイムとは、ある時代のものの見方を決定づける「思考の枠組み」という意味のトマス・クーンによってつくられた言葉です。

## ■ 自然との調和 ■

数量的思考ともいえる科学的思考によって基礎づけられている近代社会では、人間の精神や理性を偏重し、自己の身体や外界を機械のように考えて、人間の思うままに支配、利用することによって、科学文明を進展させてきました。その一方で、自然を操作、搾取する環境だと考えた結果、公害などの弊害ももたらしました。

機械論的自然観を批判し、「生きた自然」について考えた詩人に、ゲーテがいます。ゲーテは、人間と自然との調和を説き、ニュートンの物理学を批判しました。またゲーテに影響を与えたスピノザは、「神即自然<sup>すなわち</sup>」という汎神論<sup>はんしん</sup>を説いて、デカルトの心身二元論（物心二元論）を克服しようとしていました。

### ■■ 生命への畏敬 ■■

若いころにゲーテの自然観に共感し、シュヴァイツァーは「生命への畏敬」という思想を打ち立てようとしてきました。「自分は生きようとする生命に囲まれた、生きようとする生命である」と考え、生命への愛と畏敬の心を持つべきだと考えたシュヴァイツァーは、38歳でアフリカに渡り、亡くなるまで現地の人たちへの医療活動や伝道に尽くしました。

イギリス統治下のインドに生まれたガンジーは、「非暴力、不服従」をスローガンとして、独立運動を闘いました。非暴力はサンスクリットで「アヒンサー」という、仏教やジャイナ教といった古代インドからある宗教の中心的な原理です。

また宮沢賢治は、故郷の岩手で自然と調和した生き方を模索し、人間以外の生命に向き合う作品を残しました。

